Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

図書紹介　宮原廣司著『戦後教育学と教育実践』

樫下，達也

(Citation)
研究論叢,23:80-81

(Issue Date)
2017-06-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041193

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041193

宮原　廣司　著

『戦後教育学と教育実践―竹内常一に導かれて』

樫下　達也（京都教育大学）

本書は、戦後教育界における生活指導運動の第一線で活躍した竹内常一の仕事をまとめた初めての著作である。竹内の主著と、雑誌『生活指導』創刊号から715号に発表された論文を紹介しつつ、「戦後日本の歩んできた道と生活指導運動のかかわりの歴史を記した労作」である（本書帯）。著者である宮原廣司は、東京都の公立中学校教師として長年にわたり子どもたちと向き合いながら、全国生活指導研究協議会の常任理事をつとめ、生活指導実践に関する著書も複数刊行している。その著者が教師退職後に「生活指導教師として最も多くの研究・実践上の示唆を受け、大きな影響を受け」たという竹内の仕事のうち、自身の実践の「武器となり……教育活動の軸になり続けた『集団づくり』」が、竹内を中心にどのように理論形成され、発展させられてきたのかを明らかにすることをめざして本書は著された（1－2頁）。

以下、本書の構成を紹介しておく。

はじめに
プロローグ　竹内常一の生い立ち―研究者として登場するまで
第1章　生活指導をめぐる論争
1．大学院生として
2．大西忠治との出会い
3．仲間づくり論から集団づくり論への移行
4．全生研の創始期の研究者たちは
5．集団主義教育を擁護する
6．全生研運動を広げる
第2章　生活指導と集団づくりのめざす教育像
1．「核・班・討議づくり」路線への批判
2．批判を受けて
3．新しい課題追求へ向かって
4．『生活指導の理論』の出版
第3章　学級集団づくりの発展的展開
1．『学級集団づくり入門　第二版』の刊行
2．組織活動の前進
3．『学級集団づくり入門　第二版』刊行の時期の研究・実践動向
4．取り組み領域の拡大
第4章　子どもの発達疎外、非行・校内暴力にきりこむ
1．子どもの変化
2．子どもの発達疎外をもたらしたものの探求
3．さらに新しい事態の中で
4．「ゆとりの時間」と生活指導
5．非行・問題行動事態への取り組み
第5章　「子どもの自分くずしと自分つくり」不登校問題―思春期における人格の再統合
1．子どもの成長・発達の基盤を問い直す
2．人格的自立の探求――いじめ・登校拒否をめぐって
3．『子どもの自分くずしと自分つくり』の刊行
4．家庭と地域の再建の可能性
第6章　集団づくりの新しい展開・世界に開かれた学校へ
1．『学級集団づくり　第二版』の改訂に向けて
2．『新版学級集団づくり入門』の刊行へ
3．「子どもの権利条約」と湾岸戦争が提起したもの
4．「新学力観」と対峙する
5．学校論三部作と『教育のしごと』の刊行
第7章　新たな荒れ―発達異変のなかの子どもたち
1．再びいじめ・迫害による自殺の多発
2．『子どもの自分くずし、その後――“深

層の物語”を読みひらく』の出版
3．「新たな荒れ」「学級崩壊」
第８章　21 世紀の生活指導を求めて
1．21 世紀へ向けての「教育改革」を読み解く
2．「90 年代を振り返り、21 世紀の生活指導を探る」の連載
3．21 世紀初頭の生活指導の課題
戦後教育関連年表
人名索引
おわりに

冒頭でも触れたように本書は竹内の仕事を整理した初めての著作であり、その点に意義がある。本書の特徴として２点を挙げておきたい。その１点目は、紹介する資料を竹内の主著数点と『生活指導』誌に発表した論文に絞って時系列で整理しているため、彼の仕事と問題関心の変化が分かりやすくまとめられている点である。例えば、竹内の初期の主著である『生活指導の理論』の内容を概観することはもちろん（第２章第４節）、その執筆に至るまでの、竹内と彼を取り巻く思想状況（集団主義教育にかんする論争など）が合わせて明らかにされている（第１章～第２章）。竹内の代表的著作の要点だけでなく、それらが彼自身の思想史上のどこに位置づくのかも明らかにされているのである。ただし、著者が中学校における実践家であることから、竹内の高等学校にかんする仕事は取り上げられていないことには留意する必要があるだろう。

２点目は、著者が公立中学校教師であるため、理論と実践を関連づけながら戦後の生活指導実践の流れを概観できる点である。すなわち、本書では竹内理論の紹介の合間に、著者の学校現場における実践の回想が挿入されるのである。それによって、各時代の現場教師にとって竹内理論がどのような意味をもつものであったのか、あるいは逆に、過去の様々な教育問題に対して竹内がどのように応えようとしたのかを、立体的に描出することに成功している。とくに第４章以降は、著者が学校現場において肌で感じた生々しい「子どもの変化」についてのエピソードを挿入しながら竹内の論稿が紹介され、彼の主著『子どもの自分くずしと自分つくり』の紹介（第５章）へといたる。こうした構成をとることにより、竹内の仕事がいかに時代の教育問題の核心を捉えたものであったのか、という点で、その説得力を増してゆく。長年にわたって学校現場の第一線で活躍してきた著者ならではの筆致といえよう。

以上の特徴２点を踏まえたとき、本書は単に戦後教育学と生活指導の教育運動・実践をまとめたものであるというだけでなく、それ以上に現代的意義をもつものであるように思われる。というのも、子どもの非行や校内暴力、貧困、いじめといった問題は一つとして過去のものになったわけではなく、今なお学校教育が抱え続ける課題だからである。戦後、学校現場の教師たちがこれらの問題に対してどのような教育理論を後ろ盾にしながら立ち向かってきたのか。本書は竹内の理論と著者の実践を具体例としながらその問いに鮮やかに応え、現在の学校教育に多くの示唆を与える好著である。

（高文研刊　2016 年６月発行、本体価格 4,200 円）